

「弁官」からみた『源氏物語』

村口進介

はじめに

本稿で取り上げる弁官は律令官制における実務の中核的役割を担う官職で左右弁官局からなり、左弁官局は中務、式部、治部、民部、右弁官局は兵部、刑部、大蔵、宮内の各四省を管轄し、各省や諸国が太政官へ上申する文書の受理、太政官での決裁事項の通達などをその職掌とする。日常的に文書を扱う職掌ゆえに漢詩文に秀でた者が任じられることも多く、「いかがは。九月九日、左大弁に、さりぬべく詩作らせてみむとてなむ」(『うつほ物語』「楼の上・下」③五六六)、「弁になさむと思しめすに、詩作らではいかがならん。四韻の文つくる者こそ弁にはなれ」(『今鏡』巻二「すべらぎの中」三七)などにその一端が見て取れる。

一方で実務官僚ゆえの謹厳実直なイメージも纏っていたらしく、柏木が女三宮を垣間見ることになる六条院の蹴鞠に、太政大臣(頭中將)の子息である「頭弁」が、「えしづめず立ちまじれば」と思わず興に誘われ加わる様子を見た光源氏が、夕霧や

柏木にも参加を促して「弁官もえをさめあへざめるを、上達部なりとも、若き衛府司たちはなか乱れたまはざらむ」(若菜上④一三八)と言う場面がある。この光源氏の言葉に『細流抄』は「辨官は儀式官なれば也。かやうの遊などをば、一面には沙汰せざる官なるべし」と施注しており、「実務官僚としての弁官が有する一般的なイメージが前提にある」とされる¹⁾。

このような中下級官僚である弁官を、学問の家の継承を主題の一つとする『うつほ物語』は主要人物たちの官職に充てる。清原俊蔭は父清原王と同じく「式部大輔左大弁」に設定され、あて宮の求婚者の一人で紀伝道出身の藤英は「右大弁」に就く²⁾。それに対し、堀内秀晃氏が「政治の日常に深入りしない女の物語として、弁官の活躍は『うつほ物語』に比して後退しているといえよう³⁾」と評するように、『源氏物語』の主要人物が弁官に就くことはない。

確かに表立って弁官が活躍する場面は『源氏物語』にほとんど見えず、その多くは端役とも言えない、群像のなかの一人というべき点景的なあり方にとどまるものの、その配置にはある傾向が見られる。先述の蹴鞠に加わった「頭弁」が頭中將の子

息であるように、光源氏をはじめとする主要人物たちの周辺には意外にも多くの弁官が散見され、その意味では物語の政治世界を構成する不可欠な要素という位置づけは確保しているようである。

これまでの研究史において、光源氏の院司を務め、女三の宮降嫁に重要な役割を果たす左中弁など個別に言及はあるものの、物語の弁官を全般的に扱ったものは管見に入らない。弁官の視角から『源氏物語』が描き出す政治世界の一端を垣間見ることが本稿の目的である。

一・光源氏をめぐる「弁官」たち

本節では光源氏にまつわって登場する弁官たちを取り上げる。印象的な人物としてまず挙げるべきは、高麗人の観相に付き添った右大弁であろう。

御後見だちて仕うまつる右大弁の子のやうに思はせて率てたてまつるに、相人おどろきて、あまたたび傾きあやしぶ。

(桐壺①三九)

光源氏の親を装って付き添った右大弁は、「いと才かしこき博士にて、言ひかはしたることどもなむいと興ありける。文など作りかはして」(同四〇)とあり、高麗の相人と対等に詩文を交し合う才人で、玉上琢弥『源氏物語評釈』は左大弁を履歴とする菅原道真をモデルに挙げる。光源氏の元服の儀式で「その日の

御前の折櫃物、籠物など」(同四七)を承って奉仕する右大弁も同一人物と考えられ、養育係的な役割を担う存在であった。

同じ大弁ということではもう一人、松風巻に光源氏と唱和歌を交わした左大弁がいる。明石の君に会うため大堰を訪れた光源氏を迎えに集まった人々を桂の院で饗応した折に、明石流離時代を想起し「めぐり来て手にとるばかりさやけきや淡路の島のあはと見し月」と詠む光源氏に、「すこしおとなびて、故院の御時にも睦まじう仕うまつり馴れし人」と、桐壺帝から信任も得ていたという左大弁が桐壺朝を懐かしんで、「雲の上のすみかをすててよはの月いづれの谷にかけ隠しけむ」と唱和した(②四二二)。この左大弁を「此弁若光源氏元服の時又鴻臚館にて高麗人にあひ給し時ありし人歟」と施注する『河海抄』には従えないが、当時は中弁か少弁として桐壺帝に近侍した可能性はあろう。

ちなみに、この桂の院の饗宴には冷泉帝から「御消息」もたらされ、その「御使は藏人弁」(同四一九)が務めた。帝に近侍する弁官と言えば、花山天皇踐祚にともない藏人となり左中弁を兼ねた藤原惟成がいる。『大鏡』に「花山院の御時の政は、ただこの殿(義懐)と惟成の弁として行ひたまひければ、いといみじかりしぞかし」(二九二く三)とあり、外舅の藤原義懐とともに花山朝を支えたが、『栄花物語』には天皇が「いみじうらうたきものにつかはせたまふ」(巻第二「花山たづぬる中納言」一三三)と重用した旨がみえ、帝と紐帯を結ぶ弁官の姿も留意

される。

さて、話を光源氏に戻し、彼にも「親しき」弁官が二人おり、いずれもが「左中弁」である。まず、女三の宮の光源氏への降嫁決定に至る過程で重要な働きをした左中弁を挙げよう。

この御後見どもの中に、重々しき御乳母のせうと、左中弁なる、かの院の親しき人にて年ごろ仕うまつるありけり。この宮（女三の宮）にも心寄せことにてさぶらへば、（若菜上④二九）

女三の宮の乳母のなかでも特に重んじられた者の兄で、光源氏に院司として仕え、妹の縁で女三の宮のもとへも熱心に入入りするという。このような立場を存分に活かし、朱雀院の内意を光源氏に伝える役割を担った。藤本勝義氏はこの人物を官職面から検討し、

左中弁は、参議以上を望むのは難しい官職となりつつあった背景のもとに、栄達のためには絶好の機会でもあるこの結婚問題に、源氏の家司であることを活用し、積極的に係わっていったと考えられる面もあるのである。

と結論した⁵。傍線部に対しては倉田実氏に「辨官補任」で九〇〇〜一〇〇八年までの左中弁をみると、二十九名を数えることができ、「三人を除いて、いずれも参議以上に昇進して」おり、依然として「左中弁はエリートコースなのであり、公卿になれる条件なのであった」との反論がある⁶。

物語には他に四名の左中弁が確認できる。その一人は光源氏

の「親しき家司」(②一八八)として須磨下向にも同行した源良清で、少女巻に「良清、今は近江守にて左中弁なる」(③五九)とある。左大臣の子息で頭中将の弟にも「左中弁」は見え、任官の慣例を記す『官職秘抄』(正治二(一一〇〇)年頃成立)が参議に至る「七道」として示した「藏人頭。大弁(略)。近衛中将。有年芳左中弁。式部大輔、為帝王師者。七箇国合格受領。散三位等也」の位置づけは、倉田氏が言うように保たれているように思われる⁷。

見てきたように先の大弁含め、光源氏の周辺には「睦まし」「親し」と形容される弁官が配されるが、このような関係性を考えるうえで興味深いのが、次の一節である。

七つになりたまひしこのかた、帝の御前に夜昼さぶらひたまひて、奏したまふことのならぬはなかりしかば、この御いたはりにかからぬ人なく、御徳を喜ばぬやはありし。やむごとなき上達部、弁官などの中にも多かり。それより下は数知らぬを、思ひ知らぬにはあらねど、さしあたりて、いちはやぎ世を思ひ憚りて参り寄るもなし。(須磨②一八四)

引用は、いよいよ須磨へ降る光源氏の悲運を「おほかたの世の人も、誰かはよろしく思ひきこえん」と、惜しまない者はいないとする一文に続く部分で、光源氏の推挙により官職に就いた者は上達部以下、数知れないが、世情に阿り、今や寄り付く者もない、と記すなかに「弁官」の語が見える⁸。

「いたはり」を期待して権力者のもとへ人々が集まる様子は

葵巻にも、「秋の司召」の「定め」へ参内する左大臣に「君たちもいたはり望みたまふことどもありて殿の御あたり離れたまはねば」(④四五)のように描かれる。実際、光源氏の恩顧に与つた者たちには、「童にていと睡ましうらうたきものにしたまひしかば、かうぶりなど得しまで、この御徳に隠れたりし」(関屋②三六一)とある小君(空蟬の弟)や、「この殿の藏人になしかへりみたまひし人」(須磨②二〇四)とある「筑前守」(天宰大弼の子で五節の兄弟)がいる。

藏人への推挙は薫にも「かの常陸の子ども(浮舟の異父兄弟)は、かうぶりしたりしは藏人になし、わが御衛府の将監になしなど、いたはりたまひけり」(手習⑥三六二)と、その例がある。一方で、物語に弁官への推挙が具体的に記されることはないだけに、当該場面での「弁官」の特立は目を引く。

なぜ「弁官」かの問いに明解を与えることはなかなか容易ではないが、『枕草子』が「君達は」の段で「頭中将、頭弁。権中将、四位少将。藏人弁、四位侍従。藏人少納言、藏人兵衛佐」(二六五段)と五項目に挙げる藏人は、天皇の代替わりごとに任命される宣旨職で、天皇個人との結びつきが強く、「天皇の私的秘書官または天皇家の家司」といった性格を帯び、いかにも上流貴族の子弟が就く官職に相応しい。物語の弁官には、この天皇に対する藏人のような位置づけが与えられているのではないだろうか。

このような弁官との私的で密な関係をうかがう参考として、

藤原兼家が家司のなかでもとりわけ藤原有国と平惟仲を「左右のまなこ」と称し、重用した例を挙げたい。兼家の寵愛ぶりを、『栄花物語』巻第三「さまざまのよろこび」は次のように記す。

帝も行幸せさせたまひ、東宮もおはしまして、殿の家司どもみなよろこびしたるなかに、有国、惟仲を大殿いみじきものに思しめしたり。有国は左中弁、惟仲は右中弁にて、世のおぼえ、才なども、人よりことなる人々にて、おのこのたびも加階していみじうめでたし。(①一五九)

東三条院で催された兼家の六十賀には一条帝の行幸もあり、その賞により家司たちが加階の榮に浴するなかで、焦点が二人に当てられ、その官職とともに記される。そして、「人より」抜きん出た「世のおぼえ」と「才」を強調する傍線部は彼らの弁官としての有能さとともに、それゆえの重用を示唆している。

いかにも光源氏の「親しき家司」二名がいずれも「左中弁」である事象は兼家の例に重なり、その意味では倉田氏が女三の宮の乳母の兄「左中弁」を「文章道出身かもしれない」としたうえで、「その知識から何かと光源氏の相談にのつていたのである」¹⁰⁾との推測に妥当性はあろう。

ひるがえって須磨巻の引用文、昇進や任官で光源氏の恩顧を蒙り、それを喜ばぬ者はいないと叙すなかでの「弁官」への言及は、『源氏物語』がそれを家司など光源氏に近侍する人たちが就くに相応しい官職とみなしていることを、はしなくも示すものと理解したい。

二、「弁官」に任じられる子息たち

本節では光源氏以外の主要人物、具体的には左大臣、右大臣、頭中将、鬚黒、夕霧の子息たちが弁官に就く点について述べる。

左大臣

・ 蔵人弁を召し寄せて、まめやかにかかるよしを奏せさせたまふ。(夕顔①一七五)

・ 頭中将、左中弁、さらぬ君たちも慕ひきこえて、(若紫①二二二)

右大臣

・ 御方々の里人はべりつる中に、四位少将、右中弁など急ぎ出でて送りはべりつるや、(花宴①三五九)

頭中将

・ 太政大臣殿の君たち、頭弁、兵衛佐、大夫の君など過ぐしたる(若菜上④一三七)

・ 衛門督、…、今日は、御弟ども、左大弁、藤宰相など奥の方に乗せて見たまひけり。(若菜下④三三八)

鬚黒

・ この殿の左近中将、右中弁、侍従の君なども、やがて大臣の御供に出でたまひぬ。(竹河⑥六七)

・ 右兵衛督、右大弁にて、みな非参議なるを愁はしと思へり。(竹河⑤一一三)

夕霧

・ 御子の衛門督、権中納言、右大弁など、さらぬ上達部あまたこれかれに乗りまじり、(匂宮⑤三四)

・ 御子の君たち、右大弁、侍従宰相、権中将、頭少将、蔵人兵衛佐などみなさぶらひたまふ。(権本⑤一七〇)

この五名はいずれも太政大臣へ昇るか、それが予定される人物たちで、いわば『源氏物語』の政治世界の中心をなす。その子息に必ず弁官が一人いるが、最後に掲出した権本巻の傍線部や頭中将の子息たちを列挙した「おぼえ高くやむごとなき殿上人、蔵人頭、五位の蔵人、近衛の中少将、弁官など」(行幸③三〇五)に複数の近衛次将と蔵人が見えるのに比せば、一人しかいないという方が正確であろうか。加えて、その記載順が示すように、いずれも二男か三男に設定されるという特徴が見出せる。

いま一つ、注目されるのが頭中将、鬚黒、夕霧の子息が大弁を補任している点である。大弁は公卿聴政にかけるすべての文書に対し、弁官の長として責任を負う立場にあり、その重要性は、政のなかでも上級の決裁の場に位置し、大臣・大納言が上卿を務める陣申文での申政者が大弁に限られる点などに見られるが、『西宮記』、その一例として『小右記』治安元年十二月七日条を挙げたい。

明後日定有るべし。諸卿に催すべき由、外記祐頼に仰す。但し権大納言行成・皇太后宮大夫道方必ず参るべき由加へ

て示すべし。不堪事定むべきに依りて、大弁を歴す人、件の定に預かるべきなり。

昨年分の不堪佃田奏（耕作・耕作不能田数の報告）に先立つてその対応を決める不堪佃田定を開くにあたり、上卿を務める実資は行成と道方に必ず出席するように求めた。その理由は傍線部のとおり、地方行政を知悉した大弁としての経歴を頼つてのものであった¹⁵。

このように専門的知識や能力が非常に問われる大弁に補任した人物を物語の成立に近い円融朝〜一条朝の範囲で一覽すれば次のとおりである。

〔円融朝〕藤原文範、源保光、藤原為輔、大江斉光

〔花山朝〕藤原為輔、大江斉光、藤原懷忠

〔一条朝〕藤原為輔、大江斉光、藤原懷忠、藤原在国、平惟仲、源扶義、藤原忠輔、藤原行成、藤原説孝、源道方

藤原氏に注目すれば、いずれも大中納言を極官とする北家傍流の人物たちで、鬚黒の没後、家勢に翳りが見え、「右兵衛督、右大弁」ながら非参議とある点にその反映は見られるかもしれないが、「明王の御代、四代をなむ見はべりぬれど」（花宴^①三六）と代々の輔弼臣を務める左大臣の嫡男、頭中将の場合には当たらず、夕霧も同様であろう。

代々撰関を務める藤原北家を例に、二男か三男が弁官に就く事を史実で参照すれば、顕忠（時平^{二男}）、頼忠（実頼^{二男}）、伊周（道隆^{二男}）とわずかながらその類例はあり、四男以下へ範

囲を拡げれば、良相（冬嗣五男）、忠平（基経四男）、師尹（忠平五男）、為光（師輔九男）、道兼（兼家四男）が加えられ、傍線を付した三名が大弁を経歴とする。時代准拠的には同時代的というよりは一、二世代前の感覚に近いが、この点を強調することが主旨ではない¹⁵。

登場人物の設定や造型の類型性が同一の呼称にしばしば表れ出することはすでに指摘があり、常磐井和子氏は紫の上の父式部卿宮、螢式部卿宮、蜻蛉式部卿宮にそれぞれ「侍従どまりの若君がいる例」や、都合四人登場する按察大納言などの例を示し、「恐らく作者の実際の見聞に、強く印象づけられた人物があった」¹⁶。「無意識的に一つの型をくり返し使っていたのではないだろうか」と述べる。

いま検討している弁官の事例もその一つに加えてよかろうが、本稿では部分的に切り出した設定を、作者の発想や歴史的事実の反映の問題に帰着させず、執政臣の子息たちを定型的に長男は近衛次将、二男か三男は弁官へ配置する点に、物語が描き出す貴族社会のあり様を見ておきたい。

三、文章道と「弁官」

光源氏に院司として仕え、女三の宮降嫁で重要な役割を果たした左中弁について、倉田氏が「文章道出身かもしれない」と推察していたように、弁官は大学寮の四道の一つである文章道

(紀伝道)出身者の就くことの多い官職である。夕霧の寮試に向けて催された予行の立会いに頭中将の他、「左大弁、式部大輔、左中弁などばかりして」(少女③二八)とあるのは式部大輔含め、それに見合った人選である。

このような中下級官僚の養成機関である大学寮に、光源氏は夕霧を入学させ、文章道を学ばせる。「大学の道にしばし習はさむの本意はべるにより」(少女③二二)という、その「本意」を光源氏は次のように語る。

戯れ遊びを好みて、心のままなる官爵にのぼりぬれば、時に従ふ世人の、下には鼻まじろきをしつつ、追従し、気色とりつつ従ふほどは、おのづから人とおぼえてやむごとなきやうなれど、時移り、さるべき人に立ちおくれ、世おとろふる末には、人に軽め侮らるるに、かかりどころなきことになむはべる。なほ、才をもととしてこそ、大和魂の世に用ゐらるる方も強うはべらめ。(同二二)

須磨流離の経験を踏まえ、「時に従ふ世人」に左右されることのない、執政臣として自らが抛って立つ「かかりどころ」たる「才」の養成にその主眼をおく。

光源氏は六条院に「御曹司つくりて、まめやかに、才深き師に預け」、祖母大宮のもとへの訪問も「一月に三たびばかり」に限るといったと厳しい教育方針でのぞむ(同二七)。それに夕霧は「かく苦しからでも、高き位に昇り、世に用ゐらるる人はなくやはある」(同二八)と不満を抱きつつ、生来の生真面目さ

もあつて寮試に及第し擬文章生となる。その後も頭中将から「などかく、この御学問のあながちならん」(同三七)と問われるほどに励み、翌年の二月には「進士になり」、そして「秋の司召に、かうぶり得て、侍従になりたまひぬ」(同七六)と順調に立身してゆく。

しかしその後の官途は、「文章科出身で参議昇進者(9世紀前半)11世紀前半」のほとんどが弁官を経る¹⁷⁾とされながら弁官には就かず、左中将から宰相中将へ昇るといふ、公達師弟が典型的に辿る近衛次将コースを歩む。このような設定は「読者に大いなる違和感を与えたと推察する¹⁸⁾」とも言われる。

このようなこともあり、野口元大氏は光源氏の「本意」を「あくまでこれは源家の嫡男夕霧という特別な立場にある人物のための特殊な教育の必要を説いた言葉」としたうえで、次のように意義づける¹⁹⁾。

源氏の本当の狙いはその後にあるので、それはこうして恩顧を蒙つた官僚グループは弁官・内記・外記など行政実務の中枢機構を握るわけであるが、同じ大学寮出身という身内意識もあつて、次代には彼らは夕霧の下に結集することになるだろう。

たしかに夕霧の入学をきっかけに「昔おぼえて大学の栄ゆるころなれば、上中下の人、我も我もこの道に心ざし集まれば」という状況が出来し(同三〇)、この人々が弁官などに就く可能性はある。具体的には鬚黒の二男「右中弁」はその一人かもし

れず、また「この道より出て立ちたまへる上達部など」(同二五)のなかに左大臣の「左中弁」や右大臣の「右中弁」を同定することも可能ではあるう。²⁰⁾

しかし何より、光源氏の「御徳」に与った多くの「やむごとなき上達部、弁官など」でさえ、世評を憚り須磨へ赴く光源氏とは距離を置いたという第一節の引用文を思い起こせば、果たして「同じ大学寮出身という身内意識」がいかに頼りになるかは疑わしく、そもそもそのような現実を直視し、その「本意」を説いた光源氏がかような期待を抱くとは思われない。

夕霧のためにはまず、派閥形成の論を「そもそもそのような深謀遠慮こそ大和魂にほかならない」と斥けた藤原克己氏が言うように、「それよりも「なほ、才をもととしてこそ」と語る光源氏の言葉の主旨を、文字通りに受けとめるべき」²¹⁾であろうが、光源氏が「みづからのあざればみたるかたくなしきをもて離れ」、「すくすくしき公人にしなしてん」(初音³⁾一六一)と夕霧に求めた実直さは、あくまで弁官に代表されるような実務官僚的な「才」の働かせ方ではなかったであろう。

弁官が大学寮出身者の就く官職という物語の認識からすれば、夕霧と同じ二世源氏の源保光(醍醐天皇孫、代明親王二男)が文章生、侍従などを経て以後、弁官コースを歩み(「公卿補任」安和三年条尻付)、円融朝で長らく大弁を務めたのと同じ道を進む可能性はあつたらう。実際、藤原良相、菅原道真、藤原在衡は大学寮出身で、弁官を経て大臣へ昇っており、『北山抄』卷

十「吏途指南」には公事を担うにあたり弁官の経験が活きたと語る藤原頼忠の口伝も見えるが、夕霧が結ぶ執政臣像は彼らのそれとは異なる。

この点に関わって、夕霧の大学入学を通じて見られる光源氏のふるまいに注目したい。夕霧の入学を契機に「上中下の人」が大学へ結集し、「いよいよ世の中に、才ありはかばかしき人」が「多く」なり、「殿にも文作りしげく、博士、才人どもとこるえたり。すべて何ごとにつけても、道々の人の才のほど現るる世」(少女³⁾三〇)と、あたかも「道々の物の上手ども多かるころほひ」(花宴¹⁾三六二)であつた桐壺朝を彷彿とさせる、いわゆる冷泉聖代が現出するが、傍線の一文に光源氏の邸宅でも作文会が頻繁に行われ、「博士、才人ども」が活躍の場を得たとある。

その一端はすでに夕霧の字をつける儀式で、大学寮出身の「上達部など」が「したり顔にうちほほ笑みなどしつ」いる様子や、儀式終了後、「事果ててまかづる博士、才人ども召し」、「上達部、殿上人も、さるべきかぎりをは、みなとどめさぶらはせ」催した作文会の記事にも見て取れ、とりわけ作品を読み上げ披露する講師を務め、「容貌いときよげなる人の、声づかひものものしく神さびて読みあげたるほど、いとおもしろし」(少女³⁾二六)と称えられた「左中弁」は、このうち夕霧の寮試の予行へも参列している。

このように「才人ども」を守り立てる光源氏の姿勢は次の賢

木卷の場面を思い起こさせよう。

またいたづらに暇ありげなる博士ども召し集めて、文作り
韻寒などやうのすさびわざどもをもしなど心をやりて、宮
仕をもをささしたまはず。御心にまかせてうち遊びてお
はするを、世の中には、わづらはしきこともやうやう言

ひ出づる人々あるべし。(賢木②一四〇)

桐壺院の崩御後、右大臣方が政權をほしいままに振る舞い、つ
いには左大臣も致仕するなか、不遇をかこち頭中将たちと文事
に興じる光源氏を見咎める人々もあったという。この引用文に
ついて玉上琢弥『源氏物語評釈』は、

博士は、「タダニ学業ノミニアラズ德行ヲモ兼ネ取ル」(令
義解)という者である。そういう人々が「いたづらにいと
まありげ」にしている。学問がおろそかにされ、才徳が用
いられていない。今の世はそういう政治が行われていると
いうことになる。それを忘れずにお召し出しになるのは、
大将だ。文化は大将とともにある。

と読み解いた。重用されてしかるべき才徳が顧みられず、捨て
置かれた人々に光源氏が手を差し延べる。夕霧の「才深き師」
となった大内記の抜擢も光源氏のこういったふるまいによるも
のであった。

世のひがものにて、才のほどよりは用ゐられず、すげなく
て身貧しくなむありけるを、御覧じうるところありて、か
くとりわき召し寄せたるなりけり。(少女③二九)

「才のほどよりは用ゐられ」ていない人物に目を掛け、しかる
べき活躍の場を与える光源氏のあり方は第一節で取り上げた、
多くの「やむごとなき上達部、弁官など」を引き立てる姿勢に
も通じていよう。

私邸で作文会を催す光源氏に、作文へ深い関心を寄せた藤原
道長の傍を重ね見ることもできようが、こゝでぜひ参照してみ
たいのが、藤原良相である。夕霧の大学入学をめぐる先行研究
のなかで「藤原北家で文章生や文章得業生になった者はいな
い」、あるいは「大学出身者が大臣になった例は、平安前期に
は二人の例があるのみである。一人は菅原道真」「もう一人は
藤原在衡である」との指摘を見るが、実のところ、冬嗣の五男
で極官を右大臣とする良相は薨伝に「大臣は年童稚に在りて、
局量開曠なり。弱冠に及びて、始めて大学に遊ぶ。雅より才弁
有り」(『三代実録』貞観九年十月十日条)とあり、大学寮で学ん
でいる。

良相は同母兄、良房最大のライバルとも言われ、ともに文徳、
清和朝を支えた有能な政治家でありつつ、薨伝には自活が難し
い一族子女のために延命院や崇親院を設け扶養に努めたこと
や、仏教に通暁し自ら願文を作ったことが見える。そしてその
慈愛の精神は大学の学生たちにも向けられたという。

文学の士を愛好し、大学中の貧寒の生を拵びて、時に綿絹
を賜ふ。冬天惨烈なるには、多く被を縫造し、遍に四学堂
の夜宿の者に賜ふ。

これに続けては「時節には学生の文を能くする者を喚びて、詩を賦せしめ物を賚ふこと数なり」の一文も見え、『本朝文粹』巻八所収の橋広相による「冬日を愛すべし」と賦す詩の序」の一節、「右丞相、客館を開き、以て英才を延く」が具体的に挙げられる。後藤昭雄氏は「藤原良相はその邸第や直廬にしはしばし詩宴を開いたことが知られる。それらは文人や学生達に詩文制作の場を提供し、彼らの創作活動を助長するものとなったはずである」と述べ、広相をはじめ貞観期を代表する儒家詩人である都良香、嶋田忠臣等の参加を指摘し、「平安朝漢文学史における隆盛期の一である」、『貞観期の文運の隆盛をその基盤において支えた人物と位置づけることができよう」と評価している。

このような良相のあり方が光源氏に重なることはもちろんであるが、これを補助線にあらためて夕霧の大学入学を解し、野口氏がいう「同じ大学寮出身という身内意識」の醸成を仮定するならば、それは弁官などの中下級官僚たちにはなく、彼らを引き立てる夕霧の側に働くことが期待されたと見えよう。

おわりに

本稿は「弁官」を視角に、第一節では光源氏に近侍する家司たち、第二節では執政臣の子息たち、第三節ではやや派生的ながら夕霧の大学入学をめぐる垣間見える『源氏物語』の政治

世界の一端を述べた。

最後に日本古代史研究の立場から大津透氏が述べた一節を引用したい。

紫式部は書物で少し知っていたかもしれないが、大臣や天皇の行なう政務あるいは政治がどのようなものか、実質的には何も知らなかっただろう。公卿や藏人・弁官などの行政的役割はわかっていないだろう。あるいはそうした男性による政治の世界は扱わないのが物語の伝統だといえるべきかもしれない。それにもかかわらず壮大な王権の物語を書いたところが特色である。

「実質的には何も知らなかった」「行政的役割はわかっていない」とまで言い切る確証を本稿は持ちえていないが、『源氏物語』の弁官たちが一定の役割を担い、政治世界の一駒を形づくる諸相を確認した次第である。

* 『源氏物語』『うつほ物語』『大鏡』『栄花物語』『枕草子』の引用は新編日本古典文学全集（小学館）により巻名・冊番号・頁数を記し、傍線など私に付した。また、『河海抄』は玉上琢彌『紫明抄』河海抄（角川出版）、『細流抄』は伊井春樹編『源氏物語古注集成 第7巻』（桜楓社）、『小右記』は大日本古記録、『今鏡』『三代実録』は新訂増補国史大系により、私に表記を改め、訓読した。

【註】

- (1) 安藤徹「弁官」(小町谷照彦他編『王朝文学文化歴史大事典』笠間書院、二〇一一年)
- (2) 藤英の父南蔭も「左大弁」であった。
- (3) 堀内秀晃「弁」(秋山虔編『王朝語辞典』東京大学出版会、二〇〇〇年)
- (4) 藤本勝義「女三の宮の乳母と兄左中弁」(『源氏物語の想像力』笠間書院、一九九四年、初出一九八五年)、倉本実「内親王女三の宮の婚姻と端役たち」(久保朝孝他編『端役で光る源氏物語』世界思想社、二〇〇九年)など。
- (5) 前掲註(4) 藤本論文
- (6) 前掲註(4) 倉本論文
- (7) 他の二名は、六条院の作文会で講師を務めた者(第三節で後述)と弁の尼の父(権本卷)。
- (8) 『源氏物語大成』、『源氏物語別本集成』、『河内本源氏物語校異集成』で異同は確認できない。
- (9) 藤木邦彦「藏人」(『国史大辞典』吉川弘文館)
- (10) 前掲註(4) 倉本論文
- (11) 『源氏物語』の弁官に「兄弟同官」描写はみないことは、今野鈴代「『源氏物語』に表われる一設定―藏人所の「兄弟同職」―」(『源氏物語』表現の基層)笠間書院、二〇一一年、初出二〇〇〇年)に指摘がある。
- (12) 論述の煩瑣を避けるため、官職ごとの兄弟や昇進順序の同定は省く。夕霧の子息については、田坂憲二「夕霧の子供たち」(『源氏物語の鑑賞と基礎知識』23 夕霧)至文堂、二〇〇二年)などを参照。
- (13) 同二十二日条には当年分の不堪佃田定で、行成が実資から意見を促され、それに応じる様子が記される。
- (14) 長男の保忠も右大弁を補任している。
- (15) ちなみに「うっぱ物語」の源正頼二男、師澄が「左大弁」を補任している。
- (16) 常磐井和子「匂宮・紅梅・竹河」(『源氏物語講座』四、有精堂、一九七一年)
- (17) 岸野幸子「文章科出身者の任官と昇進―藏人との関係を中心に―」(『お茶の水史学』四二、一九九八年八月)
- (18) 佐古愛己「官位・昇進に関する叙述からみた『源氏物語』の特色―物語と史書―」(『京都語文』第三号、二〇一六年十一月)
- (19) 野口元大「夕霧元服と光源氏の教育」(秋山虔他編『講座源氏物語の世界』第五集)有斐閣、一九八一年)
- (20) 坂本共展「正篇の公卿補任(二)―帚木巻以降の公卿補任―」(『源氏物語構成論』笠間書院、一九九五年)
- (21) 藤原克己「幼な恋と学問―少女巻―」(今井卓爾他編『光る君の物語』源氏物語講座3)勉誠社、一九九二年)
- (22) 第二巻、六〇九頁
- (23) 飯沼清子「平安時代中期における作文の実態―小野宮実資の批判を緒として―」(『源氏物語と漢世界』新典社、二〇一八年、初出一九八七年)
- (24) 鈴木一雄「『源氏物語』に描かれた大学寮」(山中裕他編『平安時代の文学と生活』平安貴族の環境)至文堂、一九九二年)
- (25) 田中隆昭「夕霧物語の主題」増田繁夫他編『源氏物語研究集成2』源氏物語の主題 下)風間書房、一九九九年)
- (26) 後藤昭雄「王朝の漢詩」(日本文学協会編『日本文学講座9 詩歌―古典編』大修館書店、一九八八年)。葛伝の訓読はじめ、良相に関わる記述は本論文に拠るところが大きい。
- (27) 大津透「節会と宴―紫式部の描く王権―」(山中裕編『シリーズ古典再生3 歴史のなかの源氏物語』思文閣出版、二〇一一年)